

岡山県PTA連合会会長賞

楽しむ、楽しめる、楽しませる

津山市立津山東中学校

二年生 宇佐美 多 笑

「エイエイオー。」

今朝、弟を玄関で見送った。父と母と私と、チーム宇佐美四人が手を重ね合わせて、弟に精一杯の声援を送った。

今日は弟が所属している野球チームの試合だ。六年生の弟にとって、小学校最後の公式大会の初戦らしい。ユニフォームの赤は鮮やかで白いズボンがひときわ際立つ。帰ってくるときはきっとこの白いズボンも汗と砂まみれになっているに違いない。

母と先に行った弟を追いかけるように後から私も父と向かった。試合会場は私にとっては何かと縁がある球場だ。しかしここは割愛しよう。今日の話は弟が主役である。すでにアップを終え、リラックスして楽しそうに談笑をしていた赤い集団を見

つけた。そこで私は試合にのぞむ直前の弟と合流した。私は何か声をかけようと思ったが、何も言えなかった。ただ手を振った。応援してるからね。力を込めるというよりは祈る感じだ。

今春、弟はチームを移籍した。というと聞こえはかっこいいが、単に前に所属していたチームが解散したのだ。六年生を目の前にしての話だ。弟は野球をやめようとも考えたらしい。父にキャッチボールの相手をしてもらいながら中学生を迎えようとも考えたらしい。小学生が決断するにはとても難しい状況だった。その時から私は弟に何も声がかけれなかった。自分の力ではどうにもならない環境の変化がある。今の新型コロナウイルスによる世の中もやはり。

しかし、めぐりあわせがよかった弟は今のチームに移籍し、楽しく練習している。母は送迎だけと言いながらもなかなか帰ってこない。にまにまと練習を眺めているという。父はチームの練習にとけこんでいるときく。皆が楽しんでいるのだから私もうれしい。私は赤いユニフォームの背番号「2」の活躍を祈ってじっと見つめていた。

弟はキャッチャーだ。コロナ感染対策のために観客が少ないのだろう。東京オリンピックでさえ無観客なのだ。人が少ない

のをいいことに私は父とキャッチャーの真後ろのバックネット裏に陣取った。小柄な弟は前のチームではセカンドを守っていた。だけど今、ミットを構えている姿はとても大きく見えた。

そして私は今日初めて気が付いた。キャッチャーは過酷なポジションだ。私にとっての主役がいる場所が違くと視点まで変わってくる。バッターや審判が思った以上に近い。こんなに近くにいるのか。バットで弟が叩かれたりしないのだろうか。こんなに体を張ってボールに飛びついたりするポジションなのか。こんなに暑いのにあんなにたくさんの方具をつけてあんなに動き回って熱中症にならないのか。どうかケガをしませんように。それにしても楽しそうだ。

私同様、弟のファンである母は、チームの一員としてベンチ内にいた。いつもスコアラーの母だが今日は救護要員らしい。今日も暑くなる。すでにマスクが辛い。太陽がギラギラ照りつけていた。さあ、私は特等席でスコアをつけることを楽しもう。初回、キャッチャーは早速活躍した。三塁ランナーをはさんでアウトにした。失点を防いだ。弟に言わせるとチームプレーの醍醐味だそうだ。野球は一人ではできない。隣にいた父は興奮気味に

「よっしゃ、練習成果が出たぞ。」

と私に教えてくれた。それだけ父はいつも一緒に練習に参加していたのだ。弟は打席でも活躍した。センターに向けてきれいなヒットを放った。基本のセンター返しというのだろう。父と二人思わず立ち上がった。大きな拍手を送った。一生懸命走っていた弟の耳には私たちの精一杯の応援は届いていなかったらしい。それでいい。弟は今流行りの全集中していたのだ。

試合が終わっても私にはあのセンター前ヒットの余韻が残っている。後から確認してみたが、誰もカメラを構えていなかった。だが、チーム宇佐美全員の脳裏に焼き付くほどの美しく強烈なヒットだった。夕食時に家族で盛り上がった。それなのに弟は

「忘れた。」

あっさりと言った。拍子抜けした。単なる照れかくしなのかもしれないし、もう次を見据えているのかもしれない。

自分ではどうにもならない環境下でもやりたいことをできるよう、もがいていた弟が新チームで本当に楽しんでいた。環境が変わったからには頭も気持ちも切り替えねばならない。弟はうまく適応したみたいだ。今私たちは弟のおかげで野球を楽し

ませてもらっている。楽しむ、楽しめる、楽しませる。

「エイエイオー。」

チーム宇佐美はいつでも弟の応援団だ。